進路を決めた二冊の本

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北出, 俊昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15824

進路を決めた二冊の本

北出俊昭

（きたで・としあき）元農学部教授（農業食料政策論）。京都大学農学部農林経済学科卒。全国農業協同組合中央会に就職。その後、石川県農業短期大学教授を経て、一九八六年より明治大学農学部教授。

二〇〇五年三月定年退職

主な著書には「食管制度と米価」（農林統計協会）、「米政策の展開と食管法」（富民協会）、「新食糧法と農協の米戦略」（日本経済評論社）、「日本農政の五〇年―食料政策の検証」（日本経済評論社）（以上単著）、「高度経済成長期Ⅲ―基本法農政下の食料・農業問題と農村社会の変貌―」（編著）（農林統計協会）、などがある。

人生にはさまざまな出会いがある。学生時代は、とくに友人と本との出会いが大きな影響を及ぼすように思う。ここでは、私の学生時代における二冊の本との出会いについて述べてみたい。

高校時代の私は生物に興味があり、大学では遺伝学を学びたいと思っていた。その理由は単純で、稲の増収品種を開発し、当時重要課題となっていた食料問題を改善したかったからである。大学は理学部の植物学科も考えたが、家が農家だったので農学部を選択した。

そのため、大学に入学後は生物進化などの基礎的な勉強がまず大切だと考え、「種の起源」を買い、計画を立てて読み始めた。その間、「用不用説」でダーウインとともに進化論上重要な役割を果たしたラマルクに関連した書物も読んだりしていた。

それがある日、大きな問題に直面することになった。そのきっかけとなったのがカール・カウツキーの「農業問題」であった。それは全くの偶然で、農学部の学生だから農業関係の本も読もうと思い、大学の書店で目に留まったのがこの本だったのである。もちろん、著者についてはまったく知らなかった。ただ、タイトルに「農業」がついていたから購入したに過ぎない。

しかしこの本は、「農業は如何にして資本主義となり、如何なる意味で資本主義化されるか、農業の特殊性は資本主義の中に如何なる姿をもって現れるか」を究明し、「資本主義における農業の理論的、体系的な研究」（訳者序言）をしたものであった。つまり、農業問題に関する古典の一つで、農業関係だけでなく政治・経済学分野では必読の本だったのである。それは、生物学分野での「種の起源」と同じ地位にあった。

この「農業問題」を読むうちに、たとえ増収品種を開発し生産量が増大しても、資本主義体制のもとでは、それがそのまま農民の利益になるとは限らないのではないか、という疑問が強くなった。自分たちが生産した米でありながら、供出制度により強制的に、しかも低価格で徴収され、自家用にも不足した体験があったため、この疑問が一層強くなった。そのため、「種の起源」の勉強にもどこか力が入らなくなっていった。そしていろいろ悩んだ結果、結局、遺伝学をあきらめ農業経済を選択したのである。

専門課程に進んだあとは、当然農業経済に関する本が読書の中心となった。ただ、勉強の中身とは別に、何か気持ちが晴れない日が多くなった。なぜ農業経済を勉強するのか、人が生きる目的は何なのか、などの問題が体中に詰まったような状況であった。このため

四回生になり友人はみんな就職活動に取り組んでいても、その気になれなかった。

この時に出会ったのが、エーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」である。この本は、聴講していた法学部の政治学の講義の際、先生が紹介したものであった。周知のようにフロムはフロイド左派といわれていた心理学者である。そのフロムが「人間の自由」という問題を単に心理学の立場だけでなく、社会経済的な条件と関連づけて究明したのがこの本であった。「自由からの逃走」のあと、同じ著者の「人間における自由」を買い、一気に読んだことを覚えている。

この本を読んだあと、何か心が癒され、気持ちが軽くなったように思えた。これは「農業問題」の時とは異なり、まさに心理的なことで、自分でもよく説明できないことだった。しかし、その後は体にいっぱい詰まっていた「何か」が、少しずつではあるが放出されていくように思えたのである。

「農業問題」との出会いがなければ、私は遺伝学の分野に進んでいたのは間違いない。また、「自由からの逃走」に出会わなければ、留年していたかもしれない。こう考えると、この二冊は私のその後の進路を決定した本といえるのである。ただ、こうして農業経済を

選択したにもかかわらず、いまでも、一般向けの遺伝学や進化論に関する本に興味があるのは、不思議なことである。

読書は年齢にかかわらず、心を楽しませ、生活を豊かにしてくれる。また、新しい興味を誘発し、自己啓発にもつながる。なかでも、学生時代はその後に長い人生があるので、本から受ける影響は計り知れないほど大きい。最近、テレビの影響やＩＴ化の進展などで、若者の活字離れが進んでいるといわれている。しかし、時代が変化しても読書が重要なことには変わりがない。いろいろ忙しいといっても、比較的自由な時間が多い学生時代である。工夫してその時間を確保するように努める必要があろう。その際、専門以外のいろいろな分野の読書も心がけるべきではないか。こういうのは、前述したように私が影響を受けた二冊のうちの一冊は、まさにそうした内容の本だったからである。